社大同窓会

vol. 75

since 1976

Japan College of Social Work Alumni Association

1

25

50

同窓会誌「社大同窓会」(旧原宿会)が今回第75号となりました
創刊されたのは、同窓会が再建された翌年の昭和51年10月でした。
爾来約39年間年2回の発行に努めてきました。
全国同窓生の活動をしっかり把握し、会報やホームページ等を通じて
知っていただくことも同窓会の重要な課題です。
何とぞ、ご支援、ご協力をお願いします。

学部第33期(89年度生)のつどい
11月2日(日)池袋

福島県支部地域福祉活動講演会
10月31日(金)福島県昭和村

発行所／日本社会事業大学同窓会 〒204-8555 東京都清瀬市竹丘3-1-30
電話042-496-3053　振替口座00100-9-42448　編集・印刷／株式会社JA情報サービス(日本農業新聞グループ)
ホームページ　http://jcsw-alumni.com/　発送／株式会社 同窓会事務局

北海道同窓会 2014年秋季セミナー

11月2日（日）　函館市総合福祉センター（写真提供：金子修郎）

種田函館市保健福祉部長、シンポジストの成澤さん、
阿知波さん、永澤さん（左から）

村上会長主催者の
あいさつ

11月1日（土）秋田県同窓会総会・懇親会

ホテルメトロポリタン

11月1日（土）栃木県支部 就職情報提供の会

社大生協喫茶室

12月23日（火）第14回ボランティアバス

第14回ボランティアバスが大学を出発。気仙沼市で支援活動を続けている方からお話を伺うとともに、継続して訪れている学童等でクリスマス会を行ってきます。

12月10日（水）社会福祉士実習報告会

日社大では個人でなくグループ報告にしており、クラスは多様な機関で実習を行う混合型となっています。各自の学びを融合しSWの本質を考える報告会。今年のクラスも見事な報告をしてくれました。

野球部 九州支部

昨年の11月30日（日）、５回目となる会合が午後３時から博多駅前の居酒屋で開催されました。今回は、当時野球部部長でお世話になった伊藤博胤氏にお忙しい中来て頂いての開催となりました。60代から40代までの７人が集まり当時（原宿時代）の練習、試合、合宿の思い出を学生時代にタイムスリップしたかのように熱く語り合いました。また、お酒も入って自分自身の珍プレー、好プレー（自己満足）の話など大いに盛り上がりました。伊藤さんより野球部の歴史や最近の野球部の状況等説明もあり、なつかしい気持ちと共に楽しい一日になりました。民間施設、社会福祉協議会、公務員等仕事の違いや年の差を超えて語りあえたことを糧として今年も開催したいと思っています。

11月2日（日）社大祭2日目

今日も被災地支援グループCocoaでは気仙沼カフェを開催しています。

劇団からふるスタジオ

2013年10月、日本社会事業大学卒業生・在校生を中心とし、梶谷周平主催とし立ち上げ。2014年3月2日旗揚げ公演『モモと時間泥棒』を上演する。
2015年2月8日第2回公演『ゾンビになってもkissができない』を清瀬市竹丘地域市民センターにて上演。シリアス、コメディ、ミュージカルとジャンルを問わず―笑い・悲しみ・慈しみ―を伝える事を目標とし演劇が好きな個性豊かな面々で活動している。現在、社会人・大学生・高校生13名にて清瀬市を拠点とし演劇を行っている。

石神井プレーパーク

古賀 真希子 さん
（学部25期生）

「石神井・冒険遊びの会」は、二〇〇四年から石神井プレーパークを開催してきました。「子ども時代に子どもらしく過ごせる時間と場所を作ること」、そして「子育てが楽しいと思える地域づくり」を目指して活動しています。年齢・性別・障害のある、なし・国籍に関係なく、すべての子ども達が一緒に遊べる場を地域の方と一緒に作っていきたいと願っています。

遊びには多少なりとも危険な要素が伴い、「危ない！」と止めたくなることもあります。でも、実体験が減っている今の時代、「やりたい気持ち」から自分の手や体でとことん遊ぶことは大切です。「石神井プレーパーク」では公園の許可を得て穴掘り、水遊び、木登り、ロープやハンモックの遊び、木工などをできるようにしています。いたずら心で大人に挑んでくる子、廃材を持ち込み船作りに没頭する子、車椅子から子どもの声かけにまぶしそうな笑顔を向ける青年、ゆったり時間が流れる中、そんな姿を見ることが私たちの喜びです。

近年は、プレーパークに集まる子どもや親たちを取り巻く生活や発達の課題に、気付かされることがあり、社会福祉協議会や児童館、地域のボランティア団体、発達障害の支援士、商店街ともつながり、アドバイスを頂きながら活動しています。

卒業後、仕事上では力不足を感じることも多々ありましたが、「福祉」については自分や暮らす地域で、今後も関心を持っていきたいと思います。社大の先生方、活躍されている卒業生や学生の皆様、再び出会う機会がありましたら、よろしくお願い致します。

石神井プレーパーク

●日程:4月〜6月、9月〜2月　第1・第3水曜日および第4土・日曜日の月4回。夏休み3日　●時間:4〜9月は10時〜17時、10〜2月は10時〜16時　●開催場所:都立石神井公園　サービスセンター南おべんとう広場
●問合わせ:Eメール
石神井・冒険遊びの会 shakujiipp@gmail.com
ホームページ：http://shakujiipp.web.fc2.com/

古賀 真希子さん（旧姓:永島）

【プロフィール】
●1985年/社会福祉学部児童福祉学科卒業
●卒業後2013年3月まで児童館勤務
●現在石神井冒険遊びの会にて活動

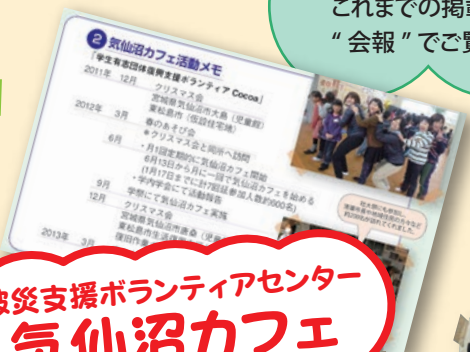
社大クラブ・サークル同窓会

日本社会事業大学同窓会

現役の活動を本誌４ページで紹介しています。
これまでの掲載は同窓会ホームページの
“会報”でご覧になれます。

まちづくりもがんばる大学生
学生有志団体
さんさんさん

アメブロにも遊びに来てください！
「さんさんさんとゆかいな仲間たち」
http://ameblo.jp/machidukuri333/



被災支援ボランティアセンター
気仙沼カフェ

Mandolin Ensemble
マンドリンアンサンブル

手話
Sign language circle TEMARI
サークルてまり

●菩提樹（ぼだいじゅ）って？

混声合唱団菩提樹では合唱曲はもちろんポップスや唱歌など様々なジャンルを分け隔てなく歌っています。主な活動としては６月の学内学会、１１月の学祭での発表、１２月の定期演奏会の開催があります。その他にも外部のお祭りや施設などに出向き演奏をさせていただいたりしています。合唱はただ単に音楽の一つの形ではなく表現方法の一つです。私たちの歌をきいて、そして何か感じてくれるものがあるのならばそんなに嬉しいことはありません。そんな聞いてくださる方の心に何かを残せるような合唱を目指し日々活動しています。

母校の支援と同窓生のネットワークを生かすため、あなたの同窓会への参加をお待ちしています。

2014年春公演。大学にて「ステキなどろぼう」。
衣装も刀など道具もすべて手作りです。

2014年夏公演。大学にて「ぱぴぷぺぽろろん」。
今年は編入生も役者として入っていただきました！

学生児童劇団 ピッポ

学生児童劇団ピッポって??

昭和46年に創立した学生児童劇団ピッポは今年で45周年を迎える。子どもたちに演劇を通じてふれあう活動は大学内に収まらず全国で公演を行っている。また、卒業生達との関わりも深いサークルである。子どもたちに楽しい時間を贈れたらと思い日々練習している。

新潟県佐渡市にて夏公演合宿。舞台づくり、料理、洗濯もすべて自分たち。遠征後半ですが、みんなこんなに笑顔。

学祭の女装美人コンテストにて優勝。よく見てください！これ男性ですよ！

活動メモ

2014年

- 4月　新入生歓迎会
- 5月　春公演
- 8月　社大夏公演&新潟県佐渡市で公演（遠征）
- 10月　学祭
- 12月　冬公演

2015年

- 2月　なかよし保育園公演&卒業旅行

劇団名となった1972年（昭和47年）の母の日公演「四辻のピッポ」

2014年冬公演。
毎年公演を行っている
紅葉丘文化センターにて
「わたしたちのサンタさん」。

新入生が入っての円陣。
総勢27名でわいわい練習しております。

これからの活動

平成27年9月に学生児童劇団ピッポ創立45周年記念として、現役生と卒業生が集まって式典を行う。児童劇を作って来た仲間同士、関係を大事にし、これからも高みを目指して子どもたちに様々な演劇を届けていけたらと思います。

母校の支援と同窓生のネットワークを生かすため、あなたの同窓会への参加をお待ちしています。

1・2面に関連写真

‘89年度生（学部33期）同窓会を11月2日に池袋で開催いたしました。

私たちは清瀬移転初年度入学生です。そう考えると、入学はもう四半世紀も前になるのですね。さて、卒業してから時は流れて2014年、福祉の現場で或いは福祉を離れ日々奮闘する者、次代を担う人たちに向けて教鞭をとる者、子育て真っ最中の者…卒業生56名が集まり、大学からは職員の数間さんにお越しいただきました。実に20年振りの再会でした。

皆それなりに時間を重ねて逞しくなっていたり、でもふと往時に帰ってバカ話が自然に出来たりと、短い持間ではありましたが、あの頃に帰って懐かしんでもいい関係、それは現在のキャリアの中で刺激し合える関係、離れていても近くにいても大切な仲間たちに変わりは無いと、お互いにそう感じたのではないでしょうか。

とにもかくにも、がむしゃらな日常をひとまず横において、楽しんでいただけたのではないかと思います。

今回幹事を中心としながら他の同期生、数間さんや大学同窓会事務局の皆様にご協力をいただいて、開催の準備・連絡を進めて参りましたが、残念ながら連絡のつかない方がいました。これは幹事として力不足であり、申し訳なく思います。また、様々な事情でお集まりいただけなかった人たちも。次回…何年後になるか分かりませんが、より多くの人たちと再会したいと願っております。

日本社会事業大学’89年度生同窓会幹事：関（旧姓相馬）美穂、矢川（旧姓粟津）晶子、阿部禎夫、八木裕子、大山弘一郎、若山実緒、増田佳史

北海道支部　2014年秋季セミナーを開催

11月2～3日（日・月）、今回の開催地は、道南ブロックの担当で、函館市です。

第1日目は、「日本社会事業大学市民公開セミナー・はこだて地域福祉フォーラム」として、函館市総合福祉センターにおいて開かれました。千葉さんの総合司会で開始され、村上会長が主催者を代表してのあいさつを行いました。

まず、開催にあたり全面的なご協力をいただいた函館市関係者等に感謝し、社大とはどういう大学であるのかを説明。また、このフォーラムの意義について話をしました。続いて、ご来賓として種田函館市保健福祉部長が、歓迎のご挨拶をしてくださいました。

これより、標記フォーラムとなり、NPO法人はこだての家理事長・和泉氏（学部14期）が、「誰もが安心・自立して暮らせる地域づくりに向けて」と題した基調講演を行いました。

目と耳に障害がある人たちが、「家族や仲間たちと離れることなく、住み慣れた函館に住み続けたい」との思いを形にするために、日本で初めての視聴覚障害者用賃貸住宅「はこだての家日吉」を開設するに至った経過がまず述べられました。この過程だけでも大変興味深く、参加者は和泉氏の話に聴き入っていました。

その上で、ここに入居している人たちの生活上の問題をどう解決し、どのような個別支援を行っているのか、を具体的に説明しました。そして、「誰もが安心・自立して暮らせる地域づくり」の大切さを強調しつつ、今後の展望を熱く語りました。

続いて、シンポジウム「高齢者を支えていくための地域と家族の助け合い」に入りました。司会を柏原氏が務め、シンポジストは、成澤・函館市保健福祉部高齢福祉課長、阿知波・函館市社会福祉協議会事業部長、永澤・函館の地域福祉を考える会事務局長の3氏です。それぞれの立場から、政策的展開、地域での取組についての発表がありました。

これを受けて、全体討論となり、会場からのご意見をいただきつつ、助言者である村上会長や、会長のご指名を受けた木村副会長が、政策的実践的視点からの助言を行いました。時間の関係もあり、些か尻切れ蜻蛉的ではあったものの、内容の濃いフォーラムを開催できました。

夜は、啄木亭において、社大関係者の懇談会を行いました。今回は道内メンバーに加え、伊藤同窓会顧問、木村及び竹田副会長、畑戸補佐も出席してくれ、賑やかな宴会となりました。懇談は、かなり遅い時間まで続いたようです。

翌3日は、施設見学です。戸井福祉会の「潮寿荘」（特養）と「潮太郎」（小規模多機能）を観ました。また、車で移動し、「はこだての家日吉」に行き、施設内見学と昼食会（利用者さんと同じ昼食）を行いました。移動の車中では、昨夜の懇親会での論議の延長線として、地域福祉の在り方、法人の役割等について貴重な論議が展開されていました。このことについては、次回の秋季セミナーを始め、今後何らかの形で論議を深めていきたいと、村上会長は大変意欲的でした。

社大同窓会としての参加者は少なかったものの、たいへん実りある秋季セミナーとなりました。道南ブロックのみなさん、ありがとうございます。

高田 哲

栃木県支部
在学生のための「交流会」「就職情報提供の会」を開催

平成26年11月1日（土）11時～ 母校生協喫茶室にて、栃木県出身者の在学生3名が参加し、開催されました。栃木県同窓会からは、岩崎支部副会長、菊池支部事務局長、大学からは古舘学生支援部長、菱沼学部准教授、畑戸校友室長補佐が参加しました。

在学生は、お互い交流を深め、最新の栃木県の就職状況に対し、熱心に耳を傾けていました。

愛媛県支部研修会を開催

2014年10月5日（日）に、愛媛県支部と愛媛県社会福祉士会が共催で研修会を開催しました。テーマは「スクールソーシャルワークとは」として、母校大学院特任教授の山下英三郎先生に御講演いただき、会員以外も含めて85人の参加がありました。また、これに先立ち、前日の4日（土）には支部懇親会も開催し、本部から伊藤顧問と竹田副会長も参加して交流を深めました。

秋田県支部
福祉公開講座と総会・懇談会を開催

11月1日（土） 秋田県支部同窓会が、福祉公開講座と総会・懇談会を開催しました。

＜第1部＞　福祉公開講座　（秋田県社会福祉会館）

本県でもDV被害や児童虐待など増加の一途をたどっていることから、母子生活支援施設や児童相談所等の関係者を集め子育てや虐待対応について学ぶ機会とするとともに、災害が頻発する昨今において災害発生時の福祉救援活動について理解を深めることをねらいとして開催し、同窓生や県内外の母子、児童福祉関係者等50名が参加しました。

＜第2部＞　総会・懇談会　（ホテルメトロポリタン）

日本社会事業大学秋田県支部同窓会は会員52名となっています。5年ぶりの開催となった今回の同窓会には、日本社会事業大学同窓会副会長の木村尚文氏と日本社会事業大学同窓生で明治学院大学教授の松原康雄氏をお招きし、福祉公開講座終了後に開催しました。懇親会には、秋田県支部同窓会の大友正義名誉会長をはじめ16名が参加、学生時代の話や近況報告等に花を咲かせ大いに盛り上がりました。

門脇 琢也

視聴覚障がい者用共同住宅「はこだての家 日吉」の設立と今後

NPO法人 はこだての家　理事長 和泉森太（学部14期）

和泉森太 氏

2010（平成22）年春、視覚障がい者らとともに、慣れ親しんだ函館に住み続けるために、勉強会を週1回ペースで始めました。そのうち、聴覚障がい者の団体も参加を申し出ることになりました。私自身は一参加者として加わっていましたが、将来NPO法人を作るべく、任意団体を結成することとなり、代表を引き受けたものです。

当初は老人ホームを作るような内容から始まりました。しかし、介護保険の制約により 市民の介護保険料がこのことにより引き上げられることが判りましたので、方向転換を図り、共同住宅を作ることにしたのです。大枠で参加者の了解が得られましたから、家賃をどうするかが次の議題になりました。基本的には、障害基礎年金の範囲内に収めることで意見の一致を見たところです。

同年5月に設立総会をやり、継続して諸々の課題を検討して来ました。任意団体の代表 として以後の方向性を確かなものとするため、数多く議論を重ねました。

2011（平成23）年9月に、「特定非営利活動法人」として認定を受け、翌年に国土交通省住宅局の「高齢者・障害者・子育て世帯等居住安定化推進事業補助金」により、 総工費約3億円の事業費のうち、補助額1割の約3千万円の申請に成功しました。事業の内容を審査して「先進的事業」と評価されたのです。北海道の事業は、特に土木・建築関係では単年度での完了は困難であり、2012（平成24）年度と翌年度の2カ年計画も承認が得られました。

2013（平成25）年6月に着工し、10月には内覧会を実施しました。その後の手直しを経て11月20日に竣工。12月より入居者を受け入れました。残念ながら十分な宣伝が行き渡らないのと、サービス付高齢者住宅も建設ラッシュで増加をたどり、利用者の奪い合いの様相を呈しておりました。このため当初は利用申し込みが低迷していました。定員の6割を超えたのは6月に入ってからのことです。5月のUHBテレビ「石井ちゃんが行く」という番組やNHK教育テレビ「ろうを生きる、難聴を生きる」 で紹介されたからです。またNHKラジオ第二放送の「聴いて聞かせて」では、渋谷の放送センターまで出向き出演してきました。

これらの放送により、反響があり、栃木県那須塩原市から入居者がありましたし、東京都多摩市、大阪市、滋賀県草津市、北九州市などからも問い合わせがありました。メディ アの反響は電話やFAXなどで、直ぐに反応が現れたところです。また陸前高田市の市議会議員の一行が視察に来ました。「東日本大震災」の被災地です。この震災での障害者の置かれた状況は悲惨だったと伝えられています。

入居者の今後については、ある程度落ち着けば面談をして、当法人の方向性を示すこと にしています。基本的には入居者本人の主体性の下に、以後の人生を設計され、他者に干渉されることなく生活を成り立たせるよう支援して行く方針です。入居者のサービスについて、可能な限り提供できるものは提供します。他方、介護保険や障害者総合支援法で公的サービスが利用できる場合には、利用者（入居者）自身の判断で利用の是非を判断してもらうようにしています。共同住宅（アパート）に過ぎないので、デイ・サービス等余力の無い状況では展開が困難で、事務的にも人員が裂けないということと、それらは既存のサービスで補えると考えたからです。

このことは、住宅建設以前から議論の中で強調してきたことなので、スタッフの理解が及ぶものと考えていました。しかし、実際にはなかなか十分には浸透しているとは言い難いものがあります。働く人たちを確保するため、「手話通訳者」、「同行援護従業者（ガイドヘルパー）」の養成研修を、2010（平成22）年から開始し、既にいずれの関係者も20名以上養成を果たしているところです。研修中にも、法人の理念を強調してきました。ただ、この養成研修を経ていない方々がなかなか馴染んでいただけないところに課題があります。

スタッフは現状では10数名で、ローテーションを組むこともなかなか困難です。賃金については、職員、パート労働者には最低賃金以上の報酬を保証し、地元の状況からも十分な対応が出来ていると思っています。基本的人権を尊重するのは当然のことですが、理解が及ぶのは並大抵のことではありません。ある意味、働く人たちも入居している人たちも置かれた状況を認識するところまでは至っていないことも考えられるのです。

住み慣れた地元を「終の棲家」として確保するという原点ともいうべき事柄と、抑圧されたこれまでの人生と向き合い、これを開放すべく不断の努力を重ねることでの「人権の復活」を獲得する意義を求めようとするものであり、単に「福祉の問題」で捉えるのは困難性があると思っています。

当然のことながら、家賃を払っていただかないと、職員の人件費は賄えないことになりますから、互いに努力をして、より好い生活環境を構成して行く必要があります。

入居者からは、働く個々のスタッフに対する批判も正直あります。しかし、それらは時間と共に解消されなければならないのです。それらを通じて乗り越えて行かなければならないと思っています。

メディアで流れたこともあり、期待の高まりはそれなりに感じ、それだけにしっかりした価値基準で対応することが求められているように感じているところです。

今後の態勢作りに意を注ぎたいと思っています。
みなさまの一層のご理解とご支援を何とぞよろしくお願いします。

――――――――――――――――――――北海道支部「アガペ」より抜粋

講演者プロフィール

1974年　日本社会事業大学児童福祉学科卒業
　　国立神戸視力障害センター入職
1980年　厚生省社会局施設課転勤。同省社会局生活課改善係長・
　　社会局老人福祉課シルバーサービス指導係長・
　　国立身体障害者リハビリテーションセンター指導課
　　生活指導専門職を経て
2000年～2008年
　　国立函館視力障害センター指導課で勤務
2011年　NPO法人「はこだての家」を立ち上げる
2013年12月　共同住宅『函館の家日吉』開設

事務局活動報告

（菱沼事務局長）

11/29 日社大の文京キャンパス福祉サロンにて同窓会運営委員会。助成規程の整備や大学創立70周年記念事業への協力等について話し合いました。同窓生の経験と叡智が在学生の学びと成長につながるような活動を目指しています。

12/20 日社大の文京キャンパスにて同窓会顧問・正副会長・事務局会議。在校生に対する支援や70周年記念行事への協力等について協議しました。戦後の社会福祉を築いてきた先輩方の熱い想いを学生達にも伝えていきたいです。

北海道同窓会に参加して

日本社会事業大学校友室　畑戸健太郎

大学の職員として、昨年の小樽に続き、今年も「北海道同窓会秋季セミナーin函館」に、2年連続で参加させていただきました。前回も感じたことですが、北海道支部同窓会は大変精力的に活動していると心強く思いました。

前回、今回と参加し、特に強く感じたことは、地元の方々が自由に参加できる「地元密着型セミナー」を開催している、ということです。門外漢の私が言うのも失礼ではありますが、もともと社会福祉は、生活に密着した事柄であり、それを簡易に市民に伝えることが必要であると考えています。社大に就職してから、そう思えるようになりました。

そして、社大の卒業生である同窓会こそが、この役割を果たすべきなのではないかと感じています。

このたびは、村上会長を始めとする北海道同窓会関係者のみなさま方、本当にお疲れ様でした。

同窓会は、日本社会事業大学の大きな財産です。これは、伊藤顧問のお言葉です。もちろん、私もそう思います。

今後とも、何とぞ一層のご支援をよろしくお願いいたします。

同窓会の動き

副会長　竹田幹雄

同窓会の本部は、昨年6月の幹事会において了承された新しい役員・事務局体制での運営が始まりました。今年度から新たに設置した運営委員会では、同窓会の運営に必要な事項の検討や、支部活動の活性化、母校との協力のあり方などについて協議をしています。

昨年度、同窓会ホームページを一新して、各支部や母校の動向など、さまざまな情報をタイムリーに発信できるようになりました。（同窓会ホームページ　http://jcsw-alumni.com/）また、今年度は、10数年ぶりに名簿を刊行するなど、同窓生のネットワークづくりに向けた取組を進めています。

各支部においては、北海道、秋田、福島、愛媛支部において、本部との共催による支部会を開催し、同窓生以外の方々を含めた多くの方々に参加をいただきました。本部では、五味基金等による資金援助のほか、教職員の派遣等の調整など、支部会の開催に向けた支援を行っています。支部会に限らず、同期会やゼミ会などの開催に当たっては、ホームページによる告知や教員との連絡調整などの支援も行っていますので、活動をご検討されている方は、お気軽に校友室までご相談ください。

さて、母校は2016年で、建学70周年を迎えようとしております。同窓会としても、これを機会に母校との協調関係をさらに深めつつ、教育と実践の橋渡しを進めていきたいと考えています。卒業生の福祉実践をより深めていくための取り組み、また大学における実践的研究の深化、在校生の実践的な現場体験・調査研究の機会の提供など、母校と同窓生がともにつくり上げられるものができないか、母校と協議を行ってまいります。

今後とも同窓会活動に、ご理解ご協力をいただきますようお願いいたします。

北海道は同窓会のパイオニア

副会長　木村尚文

前日、同期の今泉さんに誘われ、これまた同期の松原さんとともに秋田同窓会に参加しました。同窓会が終了し、「温泉に入っていこうよ」と、今泉さんに強く誘われたものの、「明日の函館フォーラムに参加しないと、髙田君に怒られる!」と泣きの涙で、津軽海峡を渡りました。

函館駅に降り立ち、早速、総合福祉センターへと向かいました。「ご苦労さん」。満面の笑みで同期の髙田さんが出迎えてくれたのも束の間、「じゃぁ、会場設営を手伝ってよ、副会長」と言われました。障害者の団体が使っていた会場を模様替え。まずは余計な椅子を運び出しました。と、ギクリ!! 腰を痛めてしまいました。

フォーラムそのものの内容は、別記のとおりですので、割愛させていただきます。ただ、とても深い内容の論議であったことだけは、報告しておきたいと思います。

さて、母校同窓会各支部は、全国でそれぞれの特徴を活かした活動を展開しています。ただ、このような形で長年実施しているのは北海道だけであり、同窓会活動のパイオニア的な存在となっているといえます。聴くところでは、1月に新春セミナー、秋には秋季セミナーと、年2回の同窓会を30年以上続けているとのことです。

特に、村上会長になってからは、同窓会内部での学びを深めると同時に、そうした学びを地域に発信していく努力をしています。そのような意味では、昨年から道央ブロック（会場は小樽）で取組始めた北海道同窓会の市民公開セミナーは、全国で先駆的かつ画期的な企画であると思います。

今後このような草の根的な取り込みが、他の支部にも広がっていくことが社大同窓会自体の活性化に大きく繋がっていくのではないかと強く期待するところです。事実、少なくない支部が様々な活動を始めているように思えます。この輪の中に今後、清瀬世代の若い同窓生のみなさんが参加し、同窓会活動がさらに広がっていくことが、社大同窓会の重要な課題でもあります。

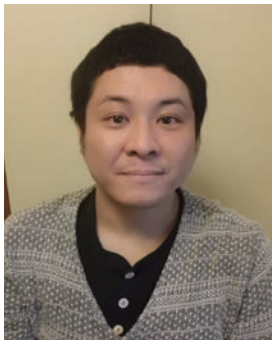
同窓会として、各地で取り組まれているこうした活動をしっかりと把握し、ホームページや会報等を通じて、他の支部に知らせていくことも重要な課題です。

このたびは秋田、北海道の同窓会に参加することができ、本当に良かったと感じました。私たちもさらなる努力を重ねていきますので、各支部のみなさんも何とぞ、ご支援、ご協力をお願いします。

ルポルタージュ

「自立」助けてと言えること 「援助」ただそこにいること

久野　享
学部46期
（2006年卒）



自立援助ホームの運営をされているそうですが？

大学卒業時には、〝自立援助ホームでいずれ働きたい〟と考えていたのですが、児童養護施設で力をつけてから、自立援助ホームで働く予定でした。しかし、私が入職した年に法人で自立援助ホームを立てるという計画があり、やる方がいなかったので、自立援助ホームでの実習経験があった私に当時の理事長からお話がありました。自分にはまだ力が無いと考え三回ほど断ったのですが熱心に誘っていただいたので、受けることになりました。当初の約束では社会的養護の経験のあるホーム長を連れて来ていただけるという話でしたが、人が見つからなかったようで社会的養護の経験が無いメンバーでの設立となりました。よって、開設当初から子どもたちのケアのことは任されていたので、経験の少なかった私にとっては非常に困難な日々でしたし、子どもたちにも苦労をかけました。しかし、いまだにその当時の子どもたちがまつぼっくりを訪ねて来てくれるので、一所懸命にやってよかったと今は思っています。また、経験のない中でホームを続けられたことは、私一人のちからではなく、他自立援助ホームの先輩ホーム長をはじめ、様々なつながりから出会った人々にいつも助けていただいているからです。

事業展開にどんな思いがありますか？

自立援助ホームは社会的養護の最後の砦とも言われていて、十五歳から二十歳の高齢児童が自立の準備のため生活をしています。平均在寮期間が一年程度なので、インケアで関係性を構築した後の卒寮後のつながりが一番重要だと考えています。まつぼっくりに来る子どもたちは児童養護施設で問題を起こし施設にいられなくなった子、継続的に虐待を受けていたにも関わらず、保護されたのが十五歳以上だった子が大半です。そのような経緯もあり、大人を信じられず、本当の意味での対人関係を作るのが難しいかったり、精神年齢が幼い場合が多いです。よって、すべての子どもたちに正社員としての就職を強いるわけではなく、彼らの成長段階に合わせて、ケアしていくことが必要です。それは、インケアの間だけでは難しいので、年齢に関係なく寄り添っていることが大事だと考えています。中にはアルバイト先から正社員になることを打診されても、不安から断ってしまう子もいました。そんな卒寮生たちがまつぼっくりと関わる中で、徐々に正社員になっていることはとてもうれしいことです。まつぼっくりには電話相談や訪問など年間四百件程度卒寮生との関わりがあります。内容は料理の作り方・仕事の愚痴というライトなものから、就労支援・市役所や児相など関係機関全体で取り組む必要がある問題など多岐にわたります。大晦日には何人かの卒寮生がまつぼっくりで年越しをするのですが、毎年彼らと楽しく過ごすことは私の楽しみにもなっています。

学生時代はどんな思い出がありますか？

一・二年生の時にはほとんど大学に行っていませんでした。二年時には大学を辞めようと思った時期もありましたが、友人や先生たちに助けていただいてなんとか卒業できたことは今となっては本当に良かったと考えています。当時授業で教えていただいた、蒲生先生の「自立とは助けてと言えること」、ゼミの恩師でもある藤岡先生の「援助とはただそこにいること」という言葉はまつぼっくりの実践の中で日々実感しています。

実習は私にとっての大きな転機でした。三年時には自立援助ホームで実習させていただきました。その時の実習先の寮生に重度の自傷行為があり、私に自傷行為の開示をしてくれた際に言っていた「頭の中がぐちゃぐちゃなんだ」という言葉を聴いて、虐待のことが何もわかっていなかったと自分の至らなさを大いに痛感しました。そして、力をつけて自立援助ホームで働きたいと考える契機となりました。

四年時にはフリースペースで実習をし、引きこもりの子どもたちと週に二回関わっていました。実習が終わった後も五年くらいはボランティアで関わらせていただき、今もその当時のスタッフ・ボランティアや子どもたちとの交流は続いています。当時は外に出れなかった子どもたちが、今も精神面や対人関係での難しさがありながらも、そのことを受け止めて、生活している話を聴かせてもらうことはいつも私の活力となっています。

今後の抱負をお願いします。

一番重要なことは、今と変わらずに私やスタッフが、まつぼっくりという寮生たちの心の安全基地に居続けることができる環境です。これからも問題があるときの相談はもちろんですが、なんとなく立ち寄りたいと思える気楽な場所でありたいと考えています。

また、今後の展開としては虐待の一次予防ができるような活動を考えています。厚生労働省からも、「子どもの育ちを支える新たなプラットフォーム」の概要が出されているので、フィンランドの〝ネウボラ〟やアメリカの〝健康な出発サービス〟のようなソーシャルワークの視点で、虐待が起こりづらくなる仕組みを作りたいと考えています。その第一歩として、すでに知り合っている地域の関係機関との勉強会をおこない、お互いのケアの専門性を学び、虐待の一次予防についての機関連携が計れるようにしていきたいです。

プロフィール

くのとおる　北海道生まれ　●平成17年：日本社会事業大学卒業。●平成18年4月：社会福祉法人松葉の園　児童養護施設まつば園に入職。●同年10月：同法人で自立援助ホームまつぼっくりを設立。●平成22年からはまつぼっくりのホーム長として勤務している。